Tohoku University

博物館民族学とアイヌ民族文化展示の評価に関する考え方

Museum Anthropology and Evaluation of Exhibiting Ainu Culture

佐々木　亨（Toru SASAKI）*

キーワード：博物館民族学、アイヌ、ミュージアム、展示評価

1．はじめに

わが国の民族学界で最近注目されているいくつかの研究分野があるが、その１つに「博物館民族学」がある。

1998年３月発行の『民族学研究』第62巻第4号では、特集として「物質文化研究の新たな可能性を求めて」が組まれ、博物館および展示をテーマにした論文が国立民族学博物館（以下「民博」と略す）と国立歴史民俗博物館（以下「歴博」と略す）の研究者より投稿された。さらに1998年４月には、民博研究部において大きな組織改革が行われ、従来の地域別研究部編成から分野別の編成になり、「民族社会研究部」「先端民族学研究部」などとともに「博物館民族学研究部」が新設された。

本稿では、民博と北海道開拓記念館（以下「記念館」と略す）で行われている最近の博物館民族学研究に関する現状を考察するとともに、記念館におけるアイヌ民族文化展示に関する評価調査の考え方について考察する。

2．民博における博物館民族学の領域

まず、民博の博物館民族学研究部の目指すところはどこにあり、この分野をどのような領域として捉えているかみてみたい。

* 東北大学東北アジア研究センター

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

同研究部長の藤井龍彦［藤井1998：7］は、1）調査され、展示される側からの疑問・意見をふまえた、民族誌や思想史、博物館のあり方に関する理論的な研究、2）新しい情報処理理論を活用し、世界情勢の分析など民族学の社会的役割に応える実践的研究の2つに研究を方向づけている。

それに対応し、専任研究者は次の2つの研究部門に所属している。各研究部門での研究内容、さらに研究者個人の研究課題と共同研究課題のうち博物館をフィールドにしている主なものを具体的にあげると以下の通りである［国立民族学博物館1999a：14-18、1999b：18-19］。

1）理論民族学研究部門

・民族学とその基礎である民族誌研究が成立するにいたった歴史的、政治的状況に関する研究

・その成果をもとに、民族学研究が今後すすむべき方向の提示

・民族学博物館を運営する上で考慮すべき新たな理論的前提の提示

＜個人研究課題＞

・アイヌの展示は、いかになされてきたか－見せ物・博覧会・博物館・民族芸術という視点から－

・海外の博物館における日本に関する展示の調査研究

＜共同研究課題＞

・アチック・ミュージアム・コレクションの研究：戦前、渋沢敬三が主宰するアチック・ミュージアムによって形成された約2万点におよぶ民具コレクションの再評価と民具概念の修正問題を検討する。

・近代日本の「異文化」像と「自文化」像の形成：近代が生み出した文化の提示装置である博物館、博覧会、写真などに焦点をあて、そうした装置による日本の「異文化」像と「自文化」像の形成過程を跡づけするとともに、そこに働く社会的・認識論的規制を明らかにする。

2）博物館システム研究部門

・情報処理の理論的・技術的進展をふまえ、多元的な民族学情報の収集・分析・保存を体系的に行うためのシステム開発

・その研究成果を博物館の展示活動に応用するための実践的研究

＜個人研究課題＞

・博物館における情報機器利用展示手法に関する比較研究

・Human Relations Area Files（フラーフ）利用の有効性について

＜共同研究課題＞

・デジタル・ミュージアムのプロトタイプの研究：博物館において、デジタル技術を活用して観覧者のさまざまな知的要求を満足させる情報提供システムの検討、およびネットワークによるバーチャルミュージアムを構築する際の問題等を検討する。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

・博物館・美術館における合成素材の保存に関する基礎的研究：合成素材使用の歴史と現状を踏まえ、劣化や問題点を整理し、具体的事例を盛り込んだデータベースによる合成素材の保存修復に関する基礎資料を作成する。

このように民博の博物館民族学研究部における活動は大きく分けると、1つは民族学研究の歴史・政治的状況を踏まえた上で、民族学を研究・展示などの対象とする博物館の運営（ミュージアム・マネージメント）に資する新たな理論的枠組みを検討することである。もう1つは、最新の情報処理技術や保存科学技術などを踏まえた実践的研究をすることであり、従来からあるいわゆる博物館学またはミュージアム・マネージメント研究の蓄積の民族学への適用や応用と考えられる（注1）。このように両者の研究ベクトルは、前者が民族学研究から博物館学研究に資する方向へと進み、その逆に後者は博物館学研究から民族学研究に資する方向へと進んでいるといえる。

次に、民族学研究と極めて関わりの深い、先に説明した理論民族学研究について詳しく考察したい。

3．理論民族学研究の視角

「異文化」展示の系譜をみると、その原型は16～17世紀にかけて、ヨーロッパの王侯貴族が邸宅内に競って設けた「珍品陳列室」や「驚異の部屋」にある。そこには、世界中の自然界の産物や人間の産物が集められ、それを収集した人の力と地位をあらわすものであった。その後、19世紀の進化論を基礎として、さまざまな民族を「野蛮」や「未開」から「文明」へと進化する各段階に当てはめていき、当時、野蛮な人びとを進化の段階の残存物と見なすようになった。民族学博物館の起源は、そのような考え方を普及する教育装置として、植民地支配の拡大とともに1860年以降、欧米に数多く設立されたことに遡ることができる［吉田1996：37-41, 45-47］。また、この時期は「博覧会の時代」の始まりでもあり、のちに先住民自身が会場に連れてこられ、先住民集落の展示が出現した［吉見1992：179-207］。このように「異文化」の展示は、展示する側や資料を収集した側の視点や都合から、一方的に行われてきたという長い歴史がある。したがって、理論民族学研究による新しい視角の提示は時代的な要請であったともいえる。

民博の吉田憲司は理論民族学研究の展望を次のように述べている［吉田1998：518-520］。

現在、民族学博物館の存在意義が改めて問い直され、それに伴いさまざまな新たな試みが展開されている。つまり、民族学博物館がこれまでその展示の主たる対象としてきた非西洋の諸民族における自己の歴史に対する覚醒の動きのなかで、新たな存在意義として、1）西洋と非西洋との歴史的関係性の具体的な証として、および2）文化的アイデンティティーの形成の装置として、あらためて注目され始めている。

このような流れを受けた新しい試みとして、次の4つがあると述べている。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

(a)旧来の展示に欠落していた部分を補おうとする修正主義的な展示

(b)展示という営みそのものを見つめ直そうとする自省的な展示

(c)展示する者とされる者、その展示を見る者との間の対話や共同作業を志向する展示

(d)文化の担い手自身による「自文化」の展示

それぞれに関する具体的な事例をみると、(a)に関連するものでは、1988年カナダ・カルガリー冬季オリンピックの記念事業として企画された、地元のグレンボー博物館の展覧会“The Spirit Sings”が、インディアンの団体からボイコットを受けた事例がある。その理由の１つに、博物館は先住民の文化を天然資源と同様に、衰退と滅亡に晒された貴重な資源として扱い、白人との接触当時の伝統的文化ばかりを西洋の文脈からのみ展示したことにあった［関1996：229-232］。また、Museum Anthropology誌（注２）における民博のアイヌ展示に関するNiessenの批判［Niessen1994］は、展示されているアイヌ文化は伝統的文化のみであり、アイヌの人権問題など今日的な事象に触れられていないというものであった。これに対して民博側からは、開館当時の1977年頃は、アイヌ民族を独立した民族とまだ認めていない時代であり、そのような社会的環境にあって、アイヌとともに展示を共同で作り上げたことこそ意義が大きいと反論した［Ohtsuka1996］［Shimizu1996］。

(b)に属するものとしては、1989年にニューヨークのアフリカ美術センターで試みられた「アート／アーティファクト－人類学コレクションのなかのアフリカ美術」展がある。そこでは王侯貴族の珍品陳列室の展示、民族学博物館のジオラマ展示、美術館での美術作品としての展示、現代のアート・ギャラリーでのオブジェとしての展示が再現され、同じ資料が展示のされ方でいかに違う意味付けをされているかが明確に示された。つまり、展示こそ新たな意味の創出の装置であり、民族学博物館は「異文化」像を作り出す装置であることが分かった［吉田1998：526］。また、1997年9月に民博で開催された特別展「異文化へのまなざし－大英博物館コレクションにさぐる－」も自省的な展示である。この特別展は、近代において西洋、アフリカ、オセアニア、日本が、お互いにそれぞれをどのように見つめてきたかを、まなざしの交錯の軌跡をたどりながら検証するという展示である。第１コーナー「西洋がみた異文化」では、1910年段階の大英博物館の民族誌ギャラリーのうち、アフリカとオセアニアと日本の展示場が再現された。アフリカが「奥地」、オセアニアが「楽園」という対照的なイメージのもとに語られることの多いこの２つの地域は、西洋から最も遠い「異文化」として捉えられていた。当時、日本も同様に「異文化」であったというまなざしから展示が再現された。吉田は展示図録の中で、ここでの日本に関する展示資料は、日本刀や鎧、兜であったが、当時は日露戦争終了後であり、明治から大正に移ろうとしていた日本の姿を、古来の武具で表現していたことになる。ここから我々は自分たちの文化が異文化視されることの理不尽さに気づき、またアフリカやオセアニア文化の表象にも、日本の場合と同じような偏りがある可能性を示唆していると述べている［吉田1997：29-30］。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

(c)に関しては次のような事例がある。1991年にソ連が崩壊して以降、シベリア地域での民族学調査が容易に行えるようになり、フィールド・ワーカーは先住民の歴史や社会の現状を調査し、多くの民族誌を作成してきている。その一方で、調査地域にある博物館において、彼らが先住民の祖先の過去に関する事実を提供するとともに、先住民との対話を重ね、展示資料や展示方法を常に更新していくことによって新しい知見を見出すという試みが考えられている［佐々木1998：70］。

(d)に関連する動きでは、次のようなものがある。「異文化へのまなざし」展に関連したシンポジウムの中で、マオリ出身であるニュージーランド博物館の学芸員は長年、さまざまな博物館でのマオリ文化の展示製作の経験から、マイノリティ文化が展示される過程で、いかに展示される側の民族の意向が軽視されてきたか、また意図的に歪曲されてきたかを述べ、今後は展示される側の声を展示に反映すべきと主張している［DOME編集室：12］。そのような流れの中で次第に、マイノリティ自身が自分たちの文化の表象に参加しようという機運が高まってきて、各地域ごとに自らの民族をテーマにした博物館を設立する事例も多く出ている［石森1999：104-105］。

4．記念館におけるアイヌ民族文化展示の研究

わが国において、博物館の立地する地域に暮らす先住民との関わりから博物館民族学に関心を示しているのは、アイヌ資料を収蔵し、その展示を行っている北海道の博物館であると考える。ここでは、記念館において1997年から4カ年計画で行われている共同研究「民族学的情報伝達装置としての博物館の意義に関する基礎的研究－アイヌ文化展示を中心に－」（文部省科学研究費補助金・基盤研究（C）、研究代表者：出利葉浩司）［出利葉1999：45-50］の目的および研究対象とそのアプローチ方法を紹介する。

1）目的

博物館を通して、(a)民族学的情報はどのように広く人びとに伝わっていくのか、(b)人びとの間に、アイヌをめぐる民族観、民族像が、いつ、どのようにして形成されるのか、(c)さらにそれがどのように変容していくのかを明らかにする（注3）。

2）研究対象とアプローチ方法

(a)コレクションの検討

民族学の興味の範囲内でとらえるのではなく、博物館としての観点を加味し、コレクターとアイヌとがどのように対峙したか、またそこでのコレクター側の当該文化に対する意識はどのようなものであったかを、コレクションから明らかにする（注4）。

(b)展示の検討

同館におけるアイヌ展示を企画した側の意図と来館者の理解との差異を計測調査する。

(c)周辺プログラムの検討

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

アイヌ文化展示を別の角度からレベルを変えて解説する講座などは、展示できない部分を補完するものである。ここでは同館の「体験学習プログラム（アイヌの罠づくり）」と「小学校での学芸員講話プログラム」を検討する。

(d)広報プログラムの検討

同館所蔵の民族資料が多数展示され、展示構成の中心となっている特別展、テーマ展などのポスターから、民族展示における視点と展示手法の推移、および当時の社会背景を検討する（注５）。

(e)諸外国における博物館展示レビューの検討

日本国外、特にアメリカにおいて博物館展示がいかなる方法により、どのように論評されているかを検討する。

記念館における研究は(a)・(d)が、先に記した民博の理論的枠組みの研究、(b)・(c)が実践的な研究の要素が強くあらわれていると考える。

なお(b)展示の検討では、記念館以外でアイヌなどの民族展示を持つ博物館において、また地域の「自文化」を展示している郷土博物館においても同様の調査を行い、その結果を比較検討する。また、展示観覧の際に来館者が発する会話の採取とその分類・分析についても併せて行っている。展示の検討には筆者も参加しており、その詳細については次章で述べたい。

５．アイヌ民族文化展示の評価に関する考え方

記念館で実施している(b)展示の検討について、その考え方を詳しく考察し、併せて若干の課題について記す。

（１）展示の伝達度測定

展示を企画した側の意図と来館者の理解との差異の計測には、アメリカなどの博物館において特定の展示や教育プログラムに対して実施されている評価手法の１つであるSummative Evaluation

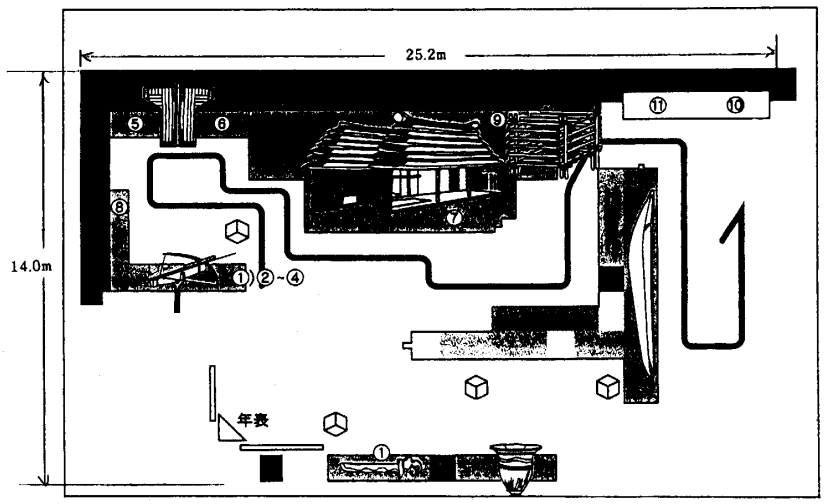

図　評価調査の対象とした北海道開拓記念館・アイヌ民族文化展示
太線の動線部分が対象コースである。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

（総括的評価）の手法（注6）を用いている［アルト1986：224-227］［三木1999：5］。

つまり、1)どのような人が展示を見たか、2)展示の中で観覧者が新たに知ったことは何か、3)理解できずに不満に思ったことは何か、4)展示のメッセージがそれを担当した学芸員の意図通りに観覧者に伝わったか、5)展示が実際に観覧された時間はどれくらいかを知るために、以下の調査方法を用いた。

まずはじめに、常設展示室におけるアイヌ文化展示（テーマ2「アイヌ文化の成立」－3「アイヌの人びとの暮らし」が対象、展示面積176㎡／図参照）の属性調査として、4)に記した展示を担当した学芸員のメッセージは何かを把握するために、展示室におけるシナリオのチェックと担当者へのヒアリングを行い、(a)展示構成、(b)伝達情報（内容、量）、(c)情報伝達方法を調べた。

次に、アイヌ文化展示の観覧者調査として、1999年9月14～15日、10月22～24日の5日間、1)を知るために(a)観覧者の基本的属性調査（性別、年代、居住地、来館目的、来館回数など）、5)を計測するために(b)行動属性調査（アイヌ文化展示内での観覧者の動線およびコーナーごとの観覧時間の計測）、2)および3)を知るために(c)アイヌ文化展示から得た情報に関する再認テスト（展示室内から得た新たなアイヌ文化に関する情報はなにか。既知の情報はなにか）をアンケート票により実施した。さらにアンケート票には、展示に関する印象、感想、不満を自由の記入してもらう欄、およびアイヌ文化との接触機会、アイヌ新法についての認識度に関する設問も付け加えた。なお、この調査に関する集計および分析結果については、できるだけ早い機会に別稿で詳しく報告する予定であり、ここでは調査を実施した際に生じたいくつかの課題について記すこととする。

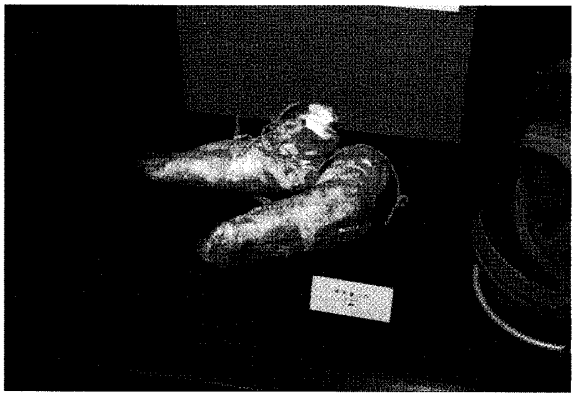

写真1　アイヌのサケ皮くつ
再認テストの中に、写真を見てその素材を問う設問があり、かなりの正解率であった。

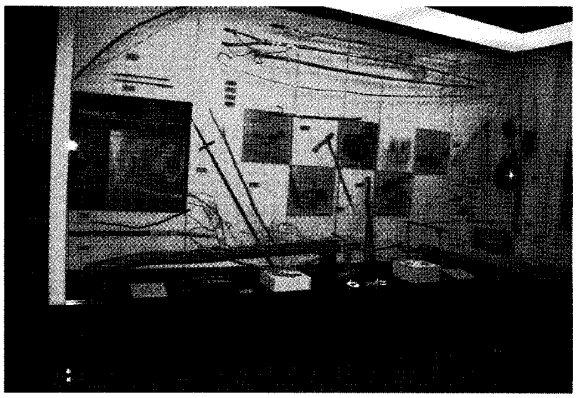

写真2　アイヌの生業展示
さまざまな狩猟・採集具、漁撈具が展示されているが、全体からアイヌの生業サイクルを正しく理解してもらうのは難しい。

例えば展示企画の意図には、サケ皮の靴の存在（写真1）や衣服の材料が樹皮であるということを伝えたいという事実伝達のレベルから、さまざまな狩猟道具を展示することによって、その地方のアイヌの生業形態の多様性や生業のサイクルなどを知ってもらいたいという概念伝達のレベル（写真2）まであり、幅が広い。前者の事項が伝わったかどうかをアンケート票で確認する

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

ことは比較的容易であるが、後者の事項が伝わったかどうかをアンケート票のみで確認することは難しいという課題がある。今回は実現しなかったが、観覧者に対する個別のインタビューなどを併用する必要があると考える。

このような課題について、民俗学の立場から、歴博の企画展「動物とのつきあい－食用から愛玩まで」を事例に、論文などの活字メディアと比較した上での展示の限界が次のように整理されている［山田1998：33-35］。

(a)論文が研究者という限定された読者を想定しているのに対して、展示は不特定多数の人びとに提示されるため、共通する前提の判断が難しい。

(b)論文では使用する概念を伝えるために言葉を連ねながら説明していくが、展示ではそれができないため、抽象的な概念を提示することが難しい。

(c)論文では、学説上の争点がある時など、２つの学説を併記することができるが、展示では見やすさという条件から制約を受け、どちらの考え方もあるというような曖昧な表現が排除される。

(d)農業技術の体系を伝えたい場合、多くの農具を展示するため、観覧者には農具の展示としてしか受け取られないことがあるように、表現したいことと実際に提示できることとの間に大きな開きがある。

(e)意図や手法とはまったく関係なしに誤解が生じることがある。

(f)展示の制作には研究成果が反映されているが、どこまでが先行研究で、どこまでが企画者のオリジナルな研究かなど、展示についての情報が開示されていない。

本調査に関して述べた先の課題は、山田が整理した展示の限界の(b)や(d)に該当すると考える。

また(e)の事項を山田は「誤読する自由」と称しており、新たな可能性を秘めた要素と位置づけている。後述する「会話の採取」に述べているように、本調査を計画する際に疑問としてあげられた事柄と関連しており、筆者も展示を「誤読する自由」について大きな関心を持っている。

２つめの課題は、展示によって得た知識かそうでないかの区別に関する点である。観覧者によってアイヌ文化に関する知識の質や量にかなりのばらつきがあるため、すでに知っていた事項なのか、それとも新たに得た知識であるのかを明確に区別する必要がある。特に調査対象者の居住地が北海道か否かによって、すでに持っている知識にかなりの差があると考える。そのため再認テストの中では、すでに知っていた事項か否に関する設問があるが、この判断は調査対象者にとって難しいようであった。

３つめの課題は、記念館の常設展示全体とその一部であるアイヌ文化展示の関係である。同館は1992年４月に常設展示の改訂が完了し、２万年前から昭和40年代までの編年により北海道の自然、歴史・文化を、本州や東アジア地域との関わりとともに展示している［北海道開拓記念館1994：18-22］。したがって今回、展示評価調査の対象としたアイヌ文化展示は、編年展示されている常設展示の一部分を構成するものである。しかし、再認テストはアイヌ文化展示を観覧した

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

直後に実施しており、調査対象者はそれ以降の展示をまだ観覧していない状況にある。そのためこの部分だけを取り出して評価調査を実施することは、北海道の歴史を概観した上でアイヌ文化をどう位置づけたかという部分を無視することである。これは今後解決する必要がある課題と考える（注7）。

（2）会話の採取

本調査を計画している過程で、先に述べたような調査は社会教育的な立場からのものであり、それだけで十分かという疑問が出てきた。つまり、学芸員が伝えたかったメッセージが展示を通して観覧者にどれぐらい伝わったかを観覧時間とともに把握する調査では、展示を通してアイヌ文化に関する知識がどれだけの人に、どれくらい正確に伝わったかは判明する。しかし、何か新しい知識を得ようとしているのではない観覧者、例えば恋人と2人で訪れる博物館の雰囲気がいいと思っている人、心を癒したいなどの理由で来館している人に対し、展示を通した情報伝達量を計測してもほとんど意味がないと考えた。

歴博で1991年に開催された企画展「変身する－仮面と異相の精神史－」の担当者は、世界の諸民族と日本の仮面が数多く展示されているコーナーで観覧者が、展示されている仮面をそっちのけにして、ある仮面によく似ているおじいちゃんの健康状態とその家族に関する噂話に花を咲かせていたのを聞いて次のように考察している。担当者のメッセージを観覧者に伝えるという発想自体、再検討する必要がある。担当者にとって学術的にどれほど重要な研究成果であっても、観覧者にとって無縁かつ無用の長物でしかない場合も少なからず存在している。観覧者間のコミュニケーションは、博物館におけるモノを介したコミュニケーションとして従来ほとんど考えられていなかった要素であるが、担当者と観覧者のコミュニケーションにも劣らず重要であるといわなければならない［橋本1998：544-547］。これは、前述した山田が整理した展示の限界(e)の立場と関連すると考える。

また滋賀県立琵琶湖博物館では、多数の観覧者は科学者ではなく生活者であるから、博物館の環境展示を「自分化」する必要があるとしている。個人の記憶・経験（個人史）、個人を取り巻く人間関係と社会のあり方（社会史）、自然のあり方（自然史）という3つの領域の接点を基盤に、各自が自分なりに展示を解釈していると述べている［嘉田1998：4-5］。

つまりこれらの報告では、学術的な情報伝達以外に、観覧者にとっての「展示の価値」が存在していることを明らかにしていると考える。筆者はこの価値が、本調査計画の過程で疑問を抱いた「何か新しい知識を得ようとしているのではない観覧者」にとっての展示の果たす機能の一つと考えた。その価値を捉えることができる場として、今回は「来館者間コミュニケーション」に注目し、2人以上で観覧しているグループ間で発生する会話の採取を行いながら、コーナー別の滞在時間、観覧動線、特徴的な行動などを計測、観察した（注8）。このように展示の価値を捉

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

えるほか、その価値の度合いを「展示で直接表現していないことに関する波及の仕方」（例えば、自分の過去におけるアイヌとの接触についての印象や感想、世界各地での民族問題に関する意見、アイヌ新法に関する考えなど）と捉え、観覧後にインタビューを実施することも検討すべきと考えている。この場合、通常会話の発生しない１人の観覧者からも情報を得ることができるというメリットがある。調査手法に関するこのような検討は、平成12年度以降の調査の際に行う予定である。

６　おわりに：博物館民族学の可能性について

以上、最近の博物館民族学研究の現状とアイヌ民族文化展示に関する評価調査について論じてきた。

民族や郷土史に関する展示では、自然科学に関する展示と異なり、展示されている資料や文化の伝統を現在も引き継いだ人びと、または今日もその資料を使用している人びとが現に生活している場合がほとんどである。なおかつ、その展示をその人びと自身が観覧することができるという状況にある。そのため、理論民族学研究は民族学博物館をより良く運営するためには必要不可欠な分野と考える。

記念館におけるアイヌ民族文化展示の評価に関しては現在、調査データの集計と分析を行っているところであり、十分な議論をするだけの材料がまだ整理されていない。しかし、筆者が調査を実施した際の印象で述べるならば、次の２つのことが言える。１つは、アイヌ文化展示を制作する際に学芸員が伝達しようとした事柄は、実際に観覧者へは１割程度しか伝わっていないことである。もう１つは、展示室内での会話は発生しやすいコーナーとそうでないところがあり、また採取された会話内容はかなり多様であるということである（写真３，４）。山田をはじめ、橋本、嘉田がそれぞれ所属している博物館において、観覧者および観覧者間で自由に展示を解釈する点に注目しているように、この分野はいままであまり関心が払われてこなかった領域であり、

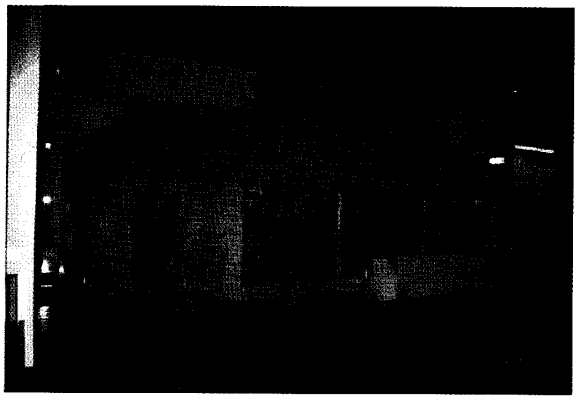

写真３　観覧者間で会話が最もよく発生した「チセ」（アイヌの伝統的住居）の実物模型

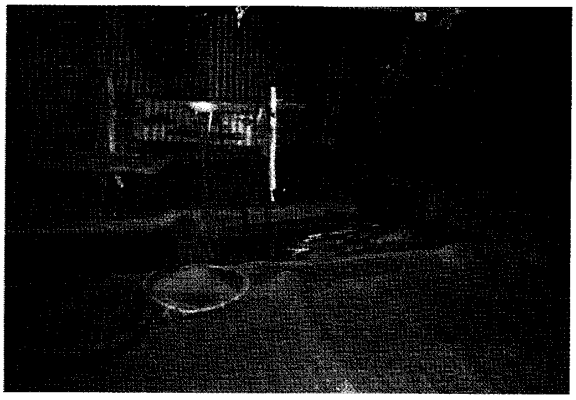

写真４　「チセ」の中に再現されている炉

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

展示制作の際の新たな視点を提示する可能性があると考える。

従来は、展示空間の最初から最後まで、担当の学芸員が一貫したストーリーを考え、それを伝達するための適当な展示手法を検討した展示シナリオで空間を構成していた。しかし、上の2つのことが事実であり、なおかつ展示における社会教育的な側面よりも、観覧者および観覧者間で自由に展示を解釈することの方が重要であると広く認識されるようになると、民族学展示におけるいくつかの可能性が考えられる。例えば「理論民族学研究の視角」で記した民族学博物館における新たな試みである、(c)展示する者とされる者、その展示を見る者との間の対話や共同作業を志向する展示や、(d)文化の担い手自身による「自文化」の展示を、その制作過程を含めて展示することで、いままで以上に観覧者の会話の発生を刺激することができると考える。アイヌ文化であればアイヌ自身が直接、展示制作にかかわることで、アイヌ民族出身ではない学芸員だけの視点を経た異文化の提示よりは、訴える力が強いと考えるためである。その場合、アイヌの制作者は「アイヌ新法」の影響や「アイヌの肖像権」に関する問題について、展示を通して広く観覧者に伝えることを望むかもしれない。そして、そこで展開される観覧者間のコミュニケーションや観覧者個人の思索の内容がたとえ事実や展示の意図に反していても、制作にかかわったアイヌ自身にとって重要な情報をそこから得ることができるであろう。

一方、展示の評価調査は一般的にわが国では単発的な研究として実施されることはあるが、博物館の事業として継続的に行われている例は極めて少ない［佐々木1999：34-36］。しかし、博物館において研究の成果品としての展示をいくつかの視点から評価し、その結果を担当者が認識することは観覧者理解にとって重要であるばかりでなく、特に民族学博物館においては、展示対象としている民族の文化と博物館の関係を再検討する上でも必要であり、継続した評価調査の実施が今後望まれる。

謝辞

アイヌ民族文化展示に関する評価調査の実施に際しては、北海道開拓記念館の多大なるご協力を賜り、また同館学芸員である出利葉浩司氏、手塚薫氏に調査協力をしていただきました。心から感謝申し上げます。

また、本稿を執筆するにあたり、「アイヌをめぐる社会政治的状況に関する人類学的研究」（文部省科学研究費補助金・基盤研究（C））による研究会において、研究代表者のスチュアート ヘンリ氏（昭和女子大学）ならびに研究分担者の方々などから貴重なご批判、ご教示をいただきました。記してお礼申し上げます。

＜注＞

（1）博物館学研究の蓄積を民族学研究へ応用した成果として、1998年3月に民博で開催され

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

た企画展「なかはどうなってるの？－民族資料をX線でみたら」がある。同館では開館以来、民族技術研究の一環として、また民族資料の保存技術を研究する手段の一部として、収蔵資料のX線透視調査を行っている。企画展ではX線写真と実物を比べながら、外見だけでは気づかなかった発見や、これまでとは違ったモノの見方を提示した［森田1998：1］。

（2）*Museum Anthropology*誌はAmerican Anthropological Association（アメリカ人類学協会）が年3回発行する雑誌で、毎号ごとに設定される特集のテーマに寄せられた論文と展示レビューが主な内容である。

（3）ただしこの研究では、民族学的な情報の伝達と民族観の形成の因果関係、およびさまざまなメディアが果たす民族学的な情報伝達の役割については、言及しないとしている［出利葉1999：46］。

（4）この分野に関する近年の研究成果としては、名古屋大学の小谷凱宣が研究代表者として進めている欧米アイヌ・コレクションの所在調査および比較研究がある［小谷1997］。

（5）広報プログラムの検討を行った研究成果として、第119回テーマ展『ポスターとの対話－民族のイメージを探る－』がある。その際、冊子［手塚、出利葉1998］が発行されている。また、本テーマ展担当者による報告［手塚1999］も刊行されている。

（6）「評価」とは来館者に対する専門家（ミュージアム・エバリュエーター）の徹底した調査と分析が伴うものであり、検証という言葉に近い。個人の経験や考えに基づく意見を記す「批評」とははっきりと異なっている［三木1999：2］。

アメリカでは評価が1970年頃から盛んに行われるようになった。特定の展示や教育プログラムに対して実施するFront-End Evaluation（企画の初期段階での模型と企画書による事前評価）、Formative Evaluation（試作展示室で実施される形成的評価）、Summative Evaluation（展示の完成後に、定点観測・行動追跡・インタビュー・再認テストなどを実施する総括的評価）などがある［守井1997：33］。一方、継続的に実施するものとして、マーケットとなる利用者の実態把握をするための調査などがある［三木1999：5］。

（7）記念館全体の常設展示は8つのテーマから構成されており、アイヌ民族文化の展示は第2テーマに位置している。通常では全体の観覧時間は1時間以上を要し、また建物の構造上、常設展示入り口は1階、出口は2階となっている。そのため、アイヌ民族文化展示における観覧行動を観察された特定の調査対象者に再認テストをお願いするのは、まだ展示内容に関する記憶が新しく、かつ調査対象者を確実に識別できる、当該展示観覧直後が適当と今回は考えた。したがって、北海道の歴史を概観した上でアイヌ文化をどう位置づけたかを調べようとする場合、再認テストと別に改めて全体の観覧後に実施するか、再認テストの調査対象者とは別のグループからサンプリングするのが現実的と考

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

える。

（8）具体的には、動物園で実施されている会話採取調査法［並木1999］を参考にし、調査を行っていることを観覧者に告知しないで会話採取を行った。なお、会話採取調査に関する倫理的な規定やガイドラインは、日本博物館協会など我が国の博物館関係団体においては制定されていない。また欧米の博物館においても、明確な基準がないのが現状のようである。

記念館における会話採取調査後に、博物館関係者からこの調査について、非告知で会話を採取することに関する倫理的問題点や、そもそも博物館で実施する調査として相応しくないなどのご指摘を受けた。筆者はその指摘に関して若干の調査をし、観覧者への調査実施に関する告知・非告知に拘わらず、いまのところ会話採取調査の実施に関わる基準として、以下のような項目が考えられるという結論に達した。

1) 博物館という場で実施しない同種の調査のルールに則っているか否か：多くの利用者調査は心理学や社会学、文化人類学などの調査手法の応用であり、それら学問分野における調査方法や公表の仕方などのルールに則っているかどうかをみる。

2) 会話採取調査を半永久的に存在するパブリックな場である博物館で実施することによる、博物館利用（者）における影響はなにか（短期的にも長期的にも。良い面も悪い面も）を具体的に検討しているか否か：調査を実施する場は、実験室でもなければ、災害・救急などの特殊状況下でもなく、半永久的に存在するパブリックな場としての博物館であることが重要な判断基準であり、その場における調査の影響を総合的に判断する。

3) 会話採取調査を実施する場となる博物館の責任者が上の２つを正しく理解し、調査実施について独自な判断を下しているか否か。

記念館における会話採取調査では、特に2)に関する検討が不十分であったと考えている。以上の基準はあくまで現状における私案であり、平成12年度に調査を継続する記念館の担当者とともに検討を進めていきたいと考える。

引用文献

アルト, M.B.　1986

「評価の計画と実施」マイルス, R.S.編.（中山邦紀：訳）『展示デザインの原理』（*Design of Educational Exhibits*）：224-259、東京：丹青社

石森秀三　1999

「民族の博物館」『博物館概論－ミュージアムの多様な世界－』：92-105、東京：財団法人放送大学教育振興会

嘉田由紀子　1998

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

「地域から地球環境を考える拠点としての博物館－第三世代の博物館の新たな展開をめざして－」『ミュージアム・データ』41：1-10、東京：丹青研究所

国立民族学博物館　1999a

「共同研究課題一覧 1999年度」『月刊 みんぱく』第23巻第8号：14-18、吹田：国立民族学博物館

－－－－　1999b

「各個研究課題一覧 1999年度」『月刊 みんぱく』第23巻第10号：18-19、吹田：国立民族学博物館

小谷凱宣編　1997

『欧米アイヌ・コレクションの比較研究』（文部省科学研究費補助金・国際学術研究成果報告書）、名古屋：名古屋大学大学院人間情報学研究科

佐々木史郎　1998

「シベリア・極東先住民のエスニシティと文化表象－地方博物館の展示をめぐって－」田畑伸一郎編『スラブ・ユーラシアの変動－自存と共存の条件－』（シンポジウム報告集）：59-71、札幌：北海道大学スラブ研究センター

佐々木亨　1999

「公立博物館における事業評価の現状－協議会・内部評価・利用者調査－」『文化経済学』1(3)：29-37、東京：文化経済学会

関雄二　1996

「異文化理解としての博物館－「文化」を語る装置－」藤巻正己・住原則也・関雄二編『異文化を「知る」ための方法』：226-242、東京：古今書院

手塚薫　1999

「フォーラムとしてのミュージアム」『北海道開拓記念館研究紀要』27：51-76、札幌：北海道開拓記念館

手塚薫、出利葉浩司　1998

『豆本18　ポスターとの対話－民族のイメージを探る－』、札幌：北海道開拓記念館

出利葉浩司　1999

「民族学的情報伝達装置としての博物館－その研究の方向への視座－」『北海道開拓記念館研究紀要』27：45-50、札幌：北海道開拓記念館

DOME編集室　1998

「特集 国際シンポジウム「21世紀における文化展示の構築をめざして」」『DOME』39：10-16,22-33、大阪：日本文教出版

並木美砂子　1999

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

「来園者行動の調査におけるコミュニケーションモデルの適用」『全日本博物館学会 第25回研究大会資料』：6-9、東京：全日本博物館学会

橋本裕之　1998

「物質文化の劇場－博物館におけるインターラクティヴ・ミスコミュニケーション－」『民族学研究』62(4)：537-562、東京：日本民族学会

藤井龍彦　1998

「「博物館」の理論的解明と実践を－博物館民族学研究部－」『月刊 みんぱく』22(6)：7-8、吹田：国立民族学博物館

北海道開拓記念館　1994

『北海道開拓記念館常設展示改訂事業報告』、札幌：北海道開拓記念館

三木美裕　1999

「アメリカでの展示の検証と評価法の応用－展示の検証とはお客様を知ることである－」『季刊 ミュージアム・データ』44：1-8、東京：丹青研究所

守井典子　1997

「博物館における評価に関する基礎研究」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』1：31-40、東京：日本ミュージアム・マネージメント学会

森田恒之　1998

『企画展 なかはどうなってるの？－民族資料をX線でみたら－』、吹田：国立民族学博物館

山田尚彦　1998

「実践的展示批評に向けての試論－国立歴史民俗博物館企画展示「動物とのつきあい 食用から愛玩まで」－」日本民俗学会編『民俗世界と博物館－展示・学習・研究のために－』：32-48、東京：雄山閣出版

吉田憲司　1996

「「異文化」展示の系譜－もうひとつの人類史・素描－」青木保ほか編『思想化される周辺世界』：33-67、東京：岩波書店

－－－－　1997

「まなざしの刻印をたどる－博物館と美術館のなかの「異文化」－」吉田憲司、ジョン・マック編『異文化へのまなざし－大英博物館と国立民族学博物館のコレクションから－』：28-40、大阪：NHKサービスセンター

－－－－　1998

「民族誌展示の現在－表象の詩学と政治学－」『民族学研究』62(4)：518-536、東京：日本民族学会

吉見俊哉　1992

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

「博覧会の政治学－まなざしの近代－」、東京：中公新書

Niessen, A.Sandra 1994

The Ainu in Mimpaku: A Representation of Japan's Indigenous People at the National Museum of Ethnology, *Museum Anthropology* 18(3) : 18-25, Arlington : American Anthropological Association

Ohtsuka, Kazuyoshi 1996

Exhibiting Ainu Culture At Minpaku: A Reply to Sandra A. Niessen, *Museum Anthropology* 20(3) :108-119, Arlington : American Anthropological Association

Shimizu, Akitoshi 1996

Cooperation, not Domination: A Rejoinder to Niessen on the Ainu Exhibition At Minpaku, *Museum Anthropology* 20(3) : 120-131, Arlington : American Anthropological Association

＊記念館におけるアイヌ民族文化展示に関する評価調査は、主に文部省科学研究費補助金・萌芽的研究（平成11、12年度）「東北アジア先住民文化に関するミュージアムの民族展示における評価研究」（課題番号：11871049、研究代表者：佐々木亨）により実施している。

また、本研究の全体については、文部省科学研究費補助金・基盤研究（C）（平成9～12年度）「民族学的情報伝達装置としての博物館の意義に関する基礎的研究－アイヌ文化展示を中心に－」（課題番号：09610322、研究代表者：出利葉浩司）、および文部省科学研究費補助金・基盤研究（C）（平成10、11年度）「アイヌをめぐる社会政治的状況に関する人類学的研究」（課題番号：10610305、研究代表者：スチュアート ヘンリ）の一部を利用している。

NII-Electronic Library Service